「遙かなるあなたのイメージ」メディア表現を考える暗室プログラム

仁井本　大介
武蔵野美術大学大学院修士課程写真コース修了
元・武蔵野美術大学 美学美術史研究室　所属

デジタル端末機器やソフトウェアの進歩とその急速な普及により、写真の撮影や編集などに専門的な技量による制限は少なくなり、所持自体においても時間や場所の制限もなく閲覧できることが可能になってきている。既にメディアであること自体を忘れてしまうくらいに我々は当たり前に画像に触れることができ、まるでこの世の中において撮影されていない場所がないかのように思われるくらいの規模となりつつある。

しかしその多くは情報として変換されることが前提で流通しており、受け取る側も高速処理することが容易になっている。写真において、一つ一つのイメージが何を指し示しているのかに思考を巡らせることはストレスとして扱われる時勢となっていると考えて良いだろう。

この時勢にただ反発するのではなく、今後そういった環境で生まれ育つ子供たちが時代性を認識し、その中で自らの立ち位置を把握するための一助として、いつしかアナログと呼ばれることとなった暗室での印画紙露光の体験とそこで浮かぶイメージと向き合うプロセスが有用ではないだろうかと考えた。

※以下、2017-2018 年にかけて筆者の修了制作として武蔵野美術大学で実施した企画を例として挙げる。
まず複数回、参加体験型のワークショップとして実施。
学生・教員有志に加え、大学祭で一般公開・参加可能な企画として行うことで立場の違う参加者も募ることができた。
最終的に修了制作発表の際には成果物の展示も暗室内に設置し、鑑賞者も追体験できるような仕組みを用意した。

＜使用物品＞
・カラープリント用印画紙（サイズ：14×17 inch）
・レーザーポインター（一般的な赤色）
＜使用環境＞
・写真暗室
・カラープリント用現像機

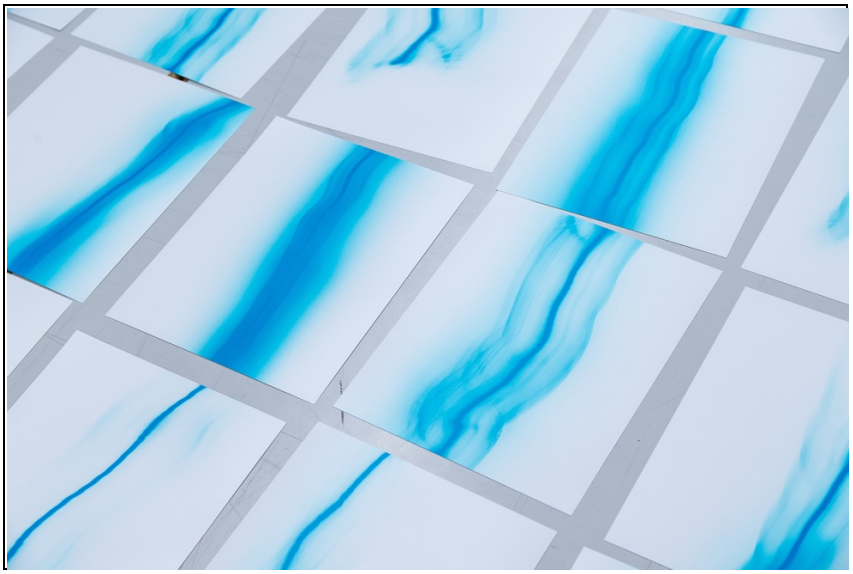
フェイズ１

暗室内で、眼を閉じ「真っ直ぐ線を描く」ことのみを考えながら、
レーザーポインターで印画紙を感光させ軌跡を残す。

［手順］
・参加者は暗室に入り、印画紙等が置いてある所定の場所まで移動する。
（できれば入口からの移動の時点で既に暗闇の状態で行うことが望ましい。それができない場合には、明るい状況で入場し所定の位置につき次第、暗転し１分以上待つようにしその環境に慣れる時間を設ける）
・暗闇の中で印画紙のサイズ感と位置を手探りで確認する。ポインターを持つ。
・利き手を使う。（コントロールしやすい方を使う）
・印画紙を直接なぞるのではなく、浮いた状態で持つ。
・発光開始（ポインターの作動確認のため）以降は目を閉じる
・手前から奥まで、できるだけ「真っ直ぐ線を描く」ことを考えながら、ゆっくり動かす。
・ポインターによる感光が終わった時点で参加者の作業は終了。現像処理は企画者で行う。
・暗室から退場する。もしくは室内の照明を点灯する。
・終了後、（印画紙の現像時間に時間が必要でもあるため）参加者には性別や年齢等などについて簡単なアンケートに回答してもらう。

【ポイント】
・使用した印画紙はカラー発色用であり、暗室は完全暗室で「真っ暗闇」である。
自身の手元も見ることができないため、主な作業は手探りで進めることとなる。
（※映画やドラマで登場するような赤い照明の暗室はモノクロ印画紙の作業環境）
・暗闇内での移動が伴うと、より身体的な感覚が拡張され、心理的な部分でも自身の感覚自体に意識が集中するといったことを体感しやすくなる傾向が強くなる。
・ポインターを動かして露光する際には印画紙の表面をなぞらず、非接触の状態で行う。
非正確となることは前提の上で「真っ直ぐ線を描く」という意識自体に向き合ってもらうことを優先した。

＊＊＊　ここに【画像１】の挿入をお願いいたします　＊＊＊



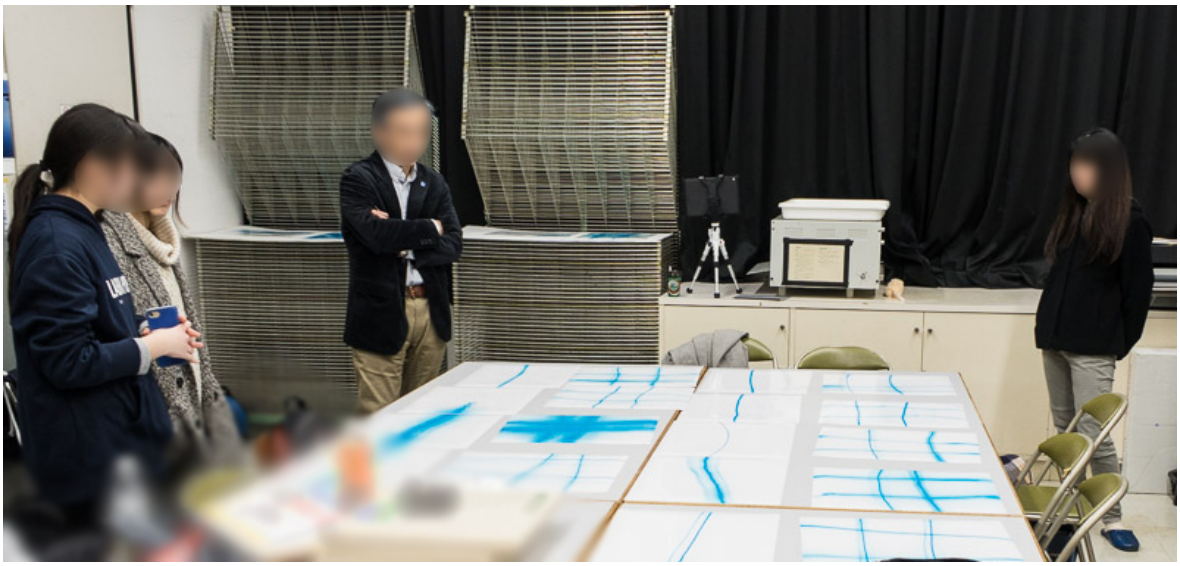
フェイズ 2

発現した軌跡のイメージを前に考える。
イメージの存在を支えているものは何か。

［手順］
・現像を経てイメージが表出した印画紙を、まずは何も伝えずに参加者の前に並べて、「自分のもの」であるかどうかを判断させる。露光作業時に何を考えどう意識したのかも含めてその根拠を挙げてもらう。
・答え合わせの上で、今一度イメージを照らし合わせてもらう。

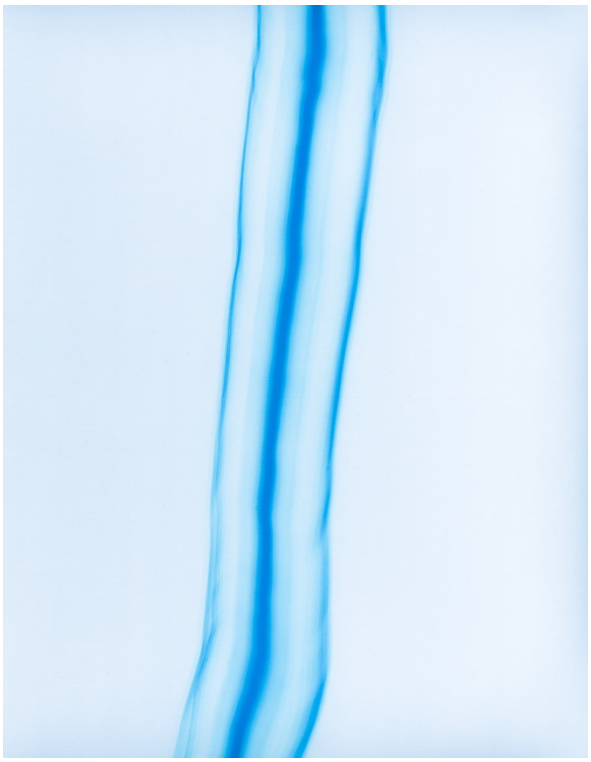
【ポイント】
・意識した記憶だけを頼りにイメージを一致させることは困難なものである。
・一致した瞬間から軌跡に人格が現れているように錯覚し始めることにも注意したい。
・「答え合わせ」としているが、それは提示した企画者への信用が前提となり、一致に関わる真偽についての多くは参加者に委ねられていない状況自体にも目を向けてもらう。企画者の虚偽行為や過失によってイメージの認識は簡単に覆されることを知ってもらう。

＊＊＊　ここに【画像２】の挿入をお願いいたします　＊＊＊



＜まとめ：もう一つの考え方として＞
　この企画で行った暗闇の中で光の軌跡を描くプロセスでは、別々の個人が行った場合には半ば強制的に個別性を持ったイメージが引き出される。また、同一人物が何度行っても同じものができない非再現性が伴う。
　生み出されるイメージそのものを性別、国籍、民族、職種等、各参加者に関係する情報コードに依存されない表現として捉えるとするならば、これを逆手にとって、表立って発表することができない環境や立場の人間が表現を行う手段としても有効であるかもしれない。

＊＊＊　ここに【画像３】の挿入をお願いいたします　＊＊



＊＊＊　ここに【画像４】の挿入をお願いいたします　＊＊＊

＊＊＊　ここに【画像５】の挿入をお願いいたします　＊＊＊